

せむかひ

発行・古平町史編纂委員会
編集・古平町史編纂室
第五十二号（一日発行）
平成六年一月一日

北海の古平風土物語

古平町に來る渡り鳥

高橋 源 五

大正十二年ころ、春・秋になると私の家（今の小野寺巳代治さんの畑）のリンゴ畑、サクランボ畑、穀物畑や裏手の山ぎわの林、谷地や小川べりの笹やぶに沢山の渡り鳥が群れになって来ていた。

雪がまだ解けきらない、やつと裏の沢（谷地）のミズバショウや、ヤチブキのつぼみがふくらみかける早春の四月から初夏にかけてと、晩秋から初冬にかけてと、きまつて渡つて來るのであった。

鶯、ヒバリ、シジュウガラ、ゴジュウガラ、ホオジロ、ウズラ、モズ、ミソサザエ、ウソ、ツグミ、サクラドリ、ヒワ、カケス、サクラドリ、カッコウ、ヤマバト、キツツキ、イシタタキ、ツバメなどなど……：：：なかなか賑やかであった。

初夏になるとツバメがやつて來て、町家の軒先や軒裏に巢を作る。卵を産み、ひなを育て上げ、秋には南に帰つて行く。初秋のころには子ツバメたちが、電線に数珠つなぎになつて止ま

り、上手に行列をつくる。朝夕には虫を求めて大空を飛び回るのが、その姿、速さは見事なものである。

当時は、ツバメが來て巢を作る家は縁起がいいと言われていたので、みんなツバメを大事にしていた。私の家にも毎年來るが、玄関のガラスをわざわざ取り外して出入り口にした。巢から糞が落ちてくるが、縁起をかついで我慢していた。

早春に群れて來る、ウ釣り、はおもしろかった。釣り糸に針をつけ、馬糞の下にいる太いミズを餌にして、糸の端を笹か木に縛りつけておくと、朝夕にはたくさん釣れた。小鳥料理が好きであった父（故小野寺源太郎）は、小鳥焼、や、小鳥鍋、を作り、みんなよく食べた。脂ものついていてなかなかうまいものであった。

つた。

すぐの兄（故小野寺地作）はこの、鳥刺し、が上手だった。とりもちを買つて來ては鳥を獲つていた。たまたまこのヒワを友だちに売ることになったが、「保護鳥のヒワをやたらに獲つてはならん。売つてはならん。この、つぼけ槌、（南部の方言で役たたずの意味）」と、父に叱られていた。

初冬に來るカケスにはカケス箱を作り、その中に干しトウキビを吊り下げて餌にし、カケスが食いついて餌を引っ張ると入口の戸が落ちるように仕掛けてある。バツタン獲り、という方法である。羽毛の色模様がきれいだったので、干しトウキビをやつて餌い馴らしていた。

晩秋の月夜になると、家の向い側に見える沢江の山の上を雁（ガン）の一群が、一列にいたり、かぎの手になつたりして飛んで行くの見える。近所の仲間が集まつて「ガン、ガン渡れ……」と、その姿がかくれるまで声をからして歌つたものである。

「アイヌの《ことわざ世間ばなし集》から」は休みます。

謹賀新年

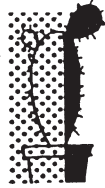
平成六年元旦

古平町史編纂委員会委員長 越中 庄司

八木 金蔵・辻 光彦・大谷 喜幸・岩崎 勝博・山口 文彦

西館 昌巳・高野 俊和・宮本 正敏・水見 八郎・田岸 倉治

古平町史編纂室長（総務課長） 工藤 敏尚・村井 芳男



明治・大正を故郷・古平
昭和・平成
に生きた名達 博翁逝く

先月、本紙で紹介した名達博様が、九十二歳の長命でポツカリ天寿を全うせられ、まことに残念でなりません。改めて悔やみを申し上げる次第です。

ご遺族のお話によりますと、何の苦しみもなく、眠るが如くに逝かれたとのことで、せめてもの慰めであつたと思っております。

葬儀は禅源寺で行われました

が、故人にふさわしいものでした。特に法話の中で、今は亡き郷土の詩人・吉田一穂との深いかわり、また、故人の若い時に詠まれた短歌のことなどがその中にあり、いっそう感銘を深くいたしました。何気なく『せせたかむい』に書いた私のつたない一文を読まれて、大変喜んでいただいたとのことですが、まさかあれが翁への最後の言葉になるうとは――。

それにしても、幼いころから交遊を続けていて、一穂の良き理解者であり、幼なじみだった最後のひとりとも言える方だったのに、ほんとうに悲しいお別れでした。今後とも、一穂自筆の貴重な遺墨の数々、ぜひとも家宝として大切に保存してください。

一穂の高弟でもある添田邦裕氏（一昨年、古平で開催した吉田一穂遺品展での解説・講演をされた方です）からの供物があつり、古平一穂の会からも供花をお贈りしたことを報告しておきます。

多くの方に『せせたかむい』をご愛読いただいております。新しい年には、また、ポチポチとふるさとのことを掘り起こしてみたいとおもいますので、よろしく――。

良いお年をお迎えください。

× × ×

新春 二題

セタカムイ近景にして初日の出
セタカムイ逆光にたつ初日の出

故郷を想う 福井孝平

古平場所と岡田家

弥三右衛門 蝦夷地へ進出

弥三右衛門が足を止めた川内村からは、彼がまだ郷里の八幡町にいたころ、遠い国の話として聞いたことのある蝦夷地の島影が、はるか海峽の彼方に見ることができた。それに川内港には、蝦夷地からの産物がときどき運ばれて来るがあつた。

若く、商売に熱心であつた新進気鋭の彼は、未知の蝦夷地での商売に賭けることにした。まず物資を買い込み、それを便船に託して松前城下（福山）に運び、試しに販売を試してみた。そのようなことを数回にわたって試し、情勢を観察したところ、蝦夷地での商売が大変有望であることを確信した。

そこで、彼は海峡を越えて松前城下に進出した。今から約四百年も前の蝦夷地福山は、五代藩主松前慶広の時代であつた。豊臣家が滅んだあと、徳川家康が天下を統一し、家康から蝦夷地の藩主として認められた直後のことであつた。ここで、姓を蠣崎（かきざき）から松前と改

めたのである。

蝦夷地では、しばしば続いたアイヌの反乱がようやく終わったばかりで、小藩であつた松前の城下には一軒の宿屋も無かつた。幸い弥三右衛門は、藩士の工藤平右衛門方に宿を頼むことができ、不便ではあつたが運んで来た品物の販売を始めた。

しかし、何せ中央から遠く離れた蝦夷地のことであり、金銭の流通が少なく、多くは物物交換であつた。その交換した品物を最も有効に売るためには、その品物を本州に運ぶための船が必要であつた。

弥三右衛門は、どのようにしてその船を手に入れたのかは分からないが、やがて京都・大阪地方から珍しいものや日用品を仕入れ、それらを薄利で販売した。正直・誠実をもって商売に当つたので、やがて土地の商人の中でも取扱高が大きく増え、ついには平右衛門の推挙により藩主や藩士への品物を納める商人（調進方）となつた。

一兵卒の軍隊日記

訓練でしぼられる新兵サン

(4)

本間 銀朔

夜の点呼で銃のそれぞれの名前を教えられた翌日は、そのことについて質問される。一回や二回聞いたぐらいで満足に答えられるものではない。整列している順番の番号で指名されるから、いつ自分に指されるかハラハラしている。いっしょに入隊した泥の木の村上豊海さんは、古平青年学校で習っていたので全部覚えていた。そんな人には

当らないで、不安そうな顔をしている者には意地悪く当るものだ。答えられないでいると「明日までに覚えておけ！」とどなられる。

二班の入隊者は、年齢が三十歳過ぎの者が多かった。今まで関係なかったようなことを教えられても、急には覚えられないものではない。答えられないと班長にドヤされる。「今日はこの程度で終わる！」との一言でようやく寝る。

夜間行軍というのもやった。夜中にたたき起こされて、どこ

へ行くのかも分からない。ほかの班ともいっしょになって、かけ足でいぶん走った。銃も剣も持たないで走るのがくたくたになる。

着いた所は北海道護国神社横であった。少し休憩してから帰路についた。この休憩の時にほかの班の者が、お守り袋からお金を出してたばこを買ったのが

班長に見つかり、大目玉をくって、持っていた金は全部保管されたとか。たばこは、隊内では一日五本が全員に配給されるがそれだけではとても足りない。甘味は「あんぱん」一個が配給される。私はたばこを吸わないので、あんぱんと交換しては食べていた。

夜間行軍から帰ると、たばこのことで班長から嚴重な注意を受け、現金を持っている者は出すように言われたが、持っているのかいなのか誰も出さなかった。当時は一円札が幅を利かしていた。私も一円札をお守り

日清戦争戦捷記念碑

今は全く建物の跡もありませんが、丸山トンネル

新地側の上辺りに、水天宮が建っていました。

水天宮は「水の神様」として信者が多く、古平の水天宮はその教務支局として、一時は六百人ほどの信者がありました。

その後、鯁漁の不振と共に信者の数も減り、当主の塩川正吉が、大火後、

明治三十年八月建立。

明記

の中に入れてはいたが、ここまでは使われないのでそのまま持っていた。

点呼のあとは必ず教育であったが、余り分らないでよく班長に叱られてばかりいたようだった。班長の一人の上等兵は岩内町発足農協の職員で、もう一人は兵長で函館の日魯会社に勤めているという話だったが、この人は温和な人であった。帰郷してから、「温和な人に教育された兵隊は、いい兵隊にはなれん。」と聞かされたが、人情味のあるこの人のことは忘れられない。

入隊後十日程も過ぎた夜の点呼の時、「字の書ける者は一歩前に出ろ」と言われたが、上手でもないで出なかつた。返事をして前に出た者がいたが、あとで聞いたら朝日新聞社のカメラマンだったという。仕事は事務的な仕事のようにだった。

翌日の点呼の時「この中に役場の書記の肩書きの者がいるはずだ。その者は前に出ろ。」と言われた。自分のことだと思つたので、恐る恐る前に出たところ「明日、使役があるから事務室の方に行くこと」と言われ、翌日、事務室へ行った。

ふるさととの群像

発明・工夫で多くの特許

町の発明家・淵田 正弘さん

明治二十九年九月十五日に生まれましたが、幼少の時に淵田家の養子となりました。今の群来町に住んでいて、群来尋常小学校に入学し、その後古平尋常高等小学校に進み、勉学を志して師範学校を受験するつもりでしたが、家計の都合で進学をあきらめ、家業である漁業に従事することになったのです。

やがて結婚しましたが、大家族の炊事をしていて手を荒らしている奥さんを見て、米とぎ器を考案しましたが、ちょうどそのころ同じようなものを作った人のことが新聞に出たのです。二十五歳の時でした。そのうち「自分は漁師に向かない」と、漁師をあきらめて、神戸市の発動機製作所に勤めることになりましたが、これが後の多くの発明につながる一つのチャンスとなったのです。会社に入ってから間もないころ、技師長に進言して、それまでの

焼玉エンジンを他社より先に新式のものに改良することに成功しました。

しかしその後、家庭の事情から古平に帰り再び漁業を継ぐことになりました。

まず鰈漁をすることになりましたが、人に先駆けて和船に十

.....

△7日はこんな日△

町内の大字改正と区域変更 本町・御崎町が誕生する

[昭和31年]

西部方面の大火後の都市計画によって、それにもない新しい町名ができたり、今までの大字区域の変更がありました。

丸山町は区域が広く人口も多いことから、便宜上丸山第一・第二町内と分けていきましたが、それまでのほぼ第二町内に該当する地域と、新地町・入船町のそれぞれ一部を編入した地域を

五馬力の焼玉エンジンを付け、まわりが驚くほどの水揚げをしたのです。

戦時中は漁船の燃料がとても不足していましたが、これを補うため、コールドタールやクロオソートなどを混ぜて使えるように、加熱装置を改良したエンジンを工夫したり、魚油を燃料油や潤滑油に使えるようなことも実験していたのです。

ある時「回転圧縮作動機関」と名付けた新型エンジンを発明し、特許出願をしました。戦時中でもあったので、早速これ

本町、また入船町・新地町・丸山町のそれぞれ一部を編入して御崎町の新しい町名が生まれ、これによって今までの大字の区域にも変更がありました。日本の大字や字町名で、一番多いのは本町という町名だそうです。自分の町を本町と言う時に、大字名の本町とまぎらわしいのが難点です。

を当時の陸軍省と海軍省に送ったところ、海軍省から呼び出しがあり、係官からエンジンの特長などについての質問がありました。したが、結局これは採用にはなりませんでした。

その後も、自営をしながら多くの工夫や発明をして、それを特許出願していきました。

その主なものを挙げると、

- 焼玉エンジンの音を低くする消音器（ガスを風車で攪乱）
- スクリューに円筒をかぶせて舵のいらぬ船
- 電気着火式石油発動機の燃料を軽油に切り替えるよう改造推進機障害物除去装置
- ハイ取り器
- 刺繍（ししゅう）枠
- 鰈刺網の目の改良
- さんま浮き流し刺網

ほかまた、すけそなどの漁獲方法についてもいろいろと創意工夫をしています。どうもほかの漁業者との折り合いがまずく、すけそ出漁をめぐって、その争いが監督官庁にまで持ち込まれたこともありました。

古平町の大火後、一家は小樽市に移住しましたが、昭和三十五年十一月二十日、六十四歳で亡くなりました。